

藤原道長の仏教理解

東館 紹見

平安時代中期、摂関期といわれる時期にいたると、個々の人物レベルでの仏教との関わりが（貴族という限定された階層ではあるが）、史料上にある程度体系的に把握し得るようになる。この動きは、従来、古代における個人的信仰の発達を知る好素材として注目され、多くの研究が重ねられてきている。それらの成果を通覧すると、そこでは平安貴族の仏教への関心・態度は、現当二世の安楽Ⅱ現世の安穩と後世の善処を願う多様な信仰の集積であるという位置づけられている。そして右の特徴は、後に成立した鎌倉仏教の特徴とされてきた「選択・専修・易行」と対比され、鎌倉仏教の祖師がえらび取っていた法華経や阿弥陀仏への信仰を包含しつつも、未だ純化されない雑多な信仰、あるいは自身の自我関心を肯定する「民族宗教」的な信仰と評価されてきたのである。しかし、こうした従来の評価は、既に指摘されている通り、人々の仏教への関心を個々の内面的信仰の枠内に限定してとらえようとする見方に基づくもので、宗教と社会とが種々の点において未分化であった前近代の状況を考える上では問題の多いものといわなくてはならない。殊に、当該期の支配層であった貴族と仏教との関係を検討するに際しては、個々の貴族の信仰のあり方を分析しその成果を集積してゆくという従来の方法に止まらず、彼らの仏教への関心・態度に、支配の対象である社会への関心・態度が自ずから投影されていることに留意し、支配層としての彼らの

「仏教理解」を考察してゆく視点が必要とされていると思われる。本報告では、摂関政治の最盛期を現出せしめた人物として知られる藤原道長（九六六一—一〇二七）を取り上げ、彼の仏教理解について考察を試みてみたい。

藤原道長と仏教との関係については、当該期の代表的な貴族として多くの研究があるが、そこでの評価は概ね上述の現当二世の安楽を願う平安貴族の一般的信仰形態を示す典型とされてきた。確かに彼の行なった多様な仏事営為を、内面的信仰に引き付けてとらえるならば、そうした評価も可能であろう。しかし、彼の行なった仏事営為の中には右の範疇ではとらえ得ないものも存する。以下ではそのことを、出家前より一貫して行なわれた法華三十講と、出家後の最大の事績である法成寺の造営を通じて検討したい。

道長は長徳元年（九五五）に内覧と氏長者に就任して以来、法華八講に代表される多くの法華講会を頻繁に開催している。これについては、従来、追善仏事および一門結集の紐帯としての八講の従前の役割を継承したものとされ、道長はこれに新たに権勢誇示の場としての役割を付加したとされている。しかし、ここではかかる役割に加え、道長が自身及び周囲にとつての法華教学聴聞・受学の間として法華講会を重視していることに注目したい。

道長は追善仏事である八講以外にも、法華三十講や、毎月数度にわたる行なわれた例講經、天台三大部や四教儀等を通じた法華教学の受学の講会などを開催し、延暦寺や園城寺の法華十講へも聴聞に赴いているが、これらの講会においては、法華教学聴聞・受学という、いわば講会本来の役割が、大きな比重を占めている。就中そのことが最も顕著にうかがわれるのが自ら主催した三十講である。これは、長保四年（一〇二二）始修以来、死去の前年に

至る二五年間欠かさず行なわれており、その継続性や以下に述べる内容的特徴からしても、彼の仏教理解を最もよく表現する仏事といふことができる。この三十講において道長は、論義の結果を日記に記し、時には自ら優劣の判定をも行なうなど、法華經を中心とする仏教教学に強い関心を示している。また、更に注目されるのは、三十講に釈教の詩作や詠歌、諸道の学者による講説論義など、当時の施政のあり方と密接に関わる諸学を研鑽する場が併催されていることである。その趣旨については、史料に「請使此講兼知聖代弘一乘矣」(和歌の序)、「常憶内外之学、其跡雖異、国家之用、其治惟同。真云俗云、不可闕一」(諸道講論後の作文の序)等と記されるように、それらの諸学を、法華經を中心とする仏教との関わりの中で、施政に資するものとして理解し編成しようとするものであったとみなされる。道長の仏教との関わりについて記した史料の多くが、彼が「一乗を弘めんとした」ことを述べるが、こうした評価も、彼が仏教就中法華經所説の一乗成仏説に対し、自身の信仰や知的関心の域に止まらず、施政との関連の中で注目していたことを示すものといえるのではなからうか。

道長は寛仁三年(一〇一九)病によって出家する。この出家と以後の仏教との関わりは、従来、専ら病平癒と来世往生のための積善として評価されてきた感がある。しかし、彼は出家以後も引き続き公事に関与する意志を示すとともに、東大寺・延暦寺の南北両戒壇での受戒を行なうなど仏教界へも積極的に参入しようとしている。道長の出家以後の活動に関しては、所謂「厭離穢土・欣求淨土」的な関心はさほど顕著にはうかがわれないのである。とすれば、彼が莫大な費用と労力を傾注した法成寺とは、如何なる意図に基づき造営されたものであったのだろうか。

法成寺の造営は、その当初より公事と同様のこととして重視が促され、公卿・受領が分担して造作に奉仕していることや、供養会の願文に、天皇による弘法から、四生六趣の抜苦解脱までが発願されていることなどからもわかるように、正に当時の体制を率けて行なわれたものであった。しかし、それとともに注意されるのは、造営や供養の場に参加・結縁する民衆の姿が、史料に具体的に描かれている点である。すなわち、造営に際しては、道長から雑人に至る人々が「同心合力」して作業を行なっており、度々参加する者には道長自ら物を賜ることもあったため、進んで参る下人も多かったという。また供養会に際しても多くの都鄙貴賤が結縁しており、その中の一聖が、中尊前に額づく天皇の姿を眼前にして、改めて仏への帰依の念を起こした話などが残されている。当時の平安京には、各権門による家産支配の中心都市として貴賤が混在する新たな状況が現出していたが、法成寺はかかる状況にあった平安京において、貴族から民衆に至る各層に仏教の名の下に「平等」に結縁の機会を開き、平安京の現状と支配のあり方の正当性を説明してみせるのに正しく好適な場であったといえよう。

このように、法華三十講の開催と法成寺の造営に代表される道長の仏教理解は、単に仏教への個人的関心・信仰に止まるものではなく、当該期の社会状況に対し、新たな施政のあり方の思想的根拠として仏教を積極的に用いようとする意図に発するものであった。仏教就中法華經の一乗成仏説に基づく仏事は、応和三(九六三)年以来、天台宗教団によって自らの権門としての有為性の可視的表現として平安京周辺に多様に開催されていたが、かかる天台宗の意図・動向に着目し、自らの施政にこれを有効に取り込んでゆくとしたのが道長であったと考えられるのである。